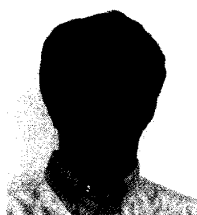


日本色彩学会誌

JOURNAL OF THE COLOR SCIENCE ASSOCIATION OF JAPAN

VOLUME 35 NUMBER 3 2011



巻頭言 共通の企て 一色彩学新時代

関西支部長 石田泰一郎

学会の活動に携わっていると「共通の企て」という言葉を思い出すことがあります。昔読んだ本¹の中で言語学者のノーム・チョムスキーが語っていた言葉です。言語学の科学革命の渦中にあった彼は、インタビューの中で、研究者の集まりに共通の企てとでもいうべき意識が共有されることの意義を述べていました。研究者はそれぞれ異なった考え方をもち、様々な問題に異なった方法でアプローチしています。しかし、そこに何か共通の目的に向かっているという意識がある場合には、お互いに何かを学ぶことができるとか、目的に向かって前進できるという感情を持つようになるというのです。それを読んだとき「なるほど、そうだろうな」と納得したものです。「企て」という言葉が一つのポイントかもしれません。これが「目標」とか「理念」などであれば、少々距離を感じそうです。しかし、「企て」には「やってみようか」という主体的なイメージがあり、面白さや、期待感、ちょっとした野心とか、仲間意識などが伴います。それでいて用意周到であるような、

各々の考えをもって学会に参加している私たち、自分たちが何をしようとしている集まりなのかということ～共通の企て～を意識してみることは意味のあることでしょう。もっとも企ての内容が問題です。それについて私は次のように考えてはどうかと思います。色彩学は新しい時代に入ったと、なぜならば光が変わりつつあるからです。数年前から進んでいるLED光源

の普及に拍車がかかり、さらに次世代の光源の開発も進行中です。そして、大震災とそれに続く電力問題は、これまでの明るさ優先の照明のあり方にも再考を迫っています。

色を生み出す源である光の環境が変わるのであれば、色彩の科学から工学、心理、デザイン、文化に至るまで、およそ全ての色彩学の領域が関係することは必然です。すでに、測光・測色、色彩工学などの分野では新光源のユニークな特性（分光分布や配光）に起因する課題が顕在化しています。それらの多くは色覚の基礎にまで立ち返って考える必要があるかも知れません。また、新時代の光環境における環境デザイン、色彩デザインの考え方と方法の探求は端緒についたところだと思います。そして、誰もが、どのような光と色の環境を私たちは選択するのか、という問いに向き合っていくことになるでしょう。光と色の新時代は、多くの課題と豊かな可能性を携えて確実に動き始めました。色彩学にとってチャレンジングな時代の始まりでもあります。

さて、2012年度の全国大会は関西支部の担当です。現在、支部役員の皆さんと実行委員会を立ち上げて準備を進めているところです。そこでは、新しい試みも含めて、いくつかの企てを議論しています。光と色の新時代を、参加者それぞれの立場から感じて頂けるような全国大会になれば良いなと思っています。

1. 「生成文法の企て」ノーム・チョムスキー、岩波書店